

受容の創造性あるいはエッカーマンの
『ゲーテとの対話』

平 野 篤 司

Johann Peter Eckermann in conversation with Goethe

In 1823, a rather modest young German named Johann Peter Eckermann paid Goethe a visit in Weimar, the Mecca of German classical culture. He was interested in literature and aspired to become a writer. Unexpectedly, he was warmly welcomed by this great poet and genius of universal talent. At that time, Goethe was already seventy-three years old and had a reputation of being one of the most gifted poets of the world and received visitors from all over the world. After the greeting, the visitor was immediately accepted as a secretary of sorts by the host.

From then on, he spent as much time as possible in having a conversation with Goethe. Goethe must have felt quite at ease when he had a conversation with this loyal secretary. Loyal he was, he dedicated himself to the words Goethe spoke for almost ten years until his death. He listened to the poet with both ears. In the presence of Eckermann, Goethe was able to freely discuss the things he did and thought about at that time. The document created by the secretary consists of these dialogues, and it is full of stimulating impressions that reflect more vividly the personality and works of the poet than Goethe's own writings. The philosopher Friedrich Nietzsche mentioned the document with the greatest respect and he believes that it is the most important work of not only of the poet, but also of modern German literature. This paper examines the aspects that made the document possible.

It is evident that the dialogues consist of spoken conversations, which the devoted secretary collected as documents and then compiled them as authentically as possible into a book. Originally, they were not written for the book. Nietzsche called it the best writing in German prose that should be read repeatedly. The writer is Eckermann whose contribution to German literature is of great importance. What did he do in the presence of his hero? The fact is that he concentrated himself entirely on listening to Goethe and understanding his words. He rarely acted proactively and could be called a man of passiveness. However, it must be added that his passiveness was active in nature and it can be said that his passive and receptive attitude towards his object made it possible for him to enter the gigantic universe of Goethe and to produce the best book according to Nietzsche. We can find a similar perception of the world in Goethe and Eckermann. Although Goethe was an active hero during the start of German modernism, his nature is more passive than active. In conversation with Eckermann, he repeatedly emphasized the importance of receiving the world in its present state, instead of theorizing it. This is also his perception towards research on nature as a natural scientist. He was quite receptive of natural phenomena that could not be easily theorized. In such cases, which happened quite often, he observed and accepted them. Underlying such phenomena, he saw God as infinite intellect in the sense of Spinoza's philosophy. Goethe was truly a great master of observation and acceptance of the universe. So was Eckermann in the presence of his master Goethe.

1. ニーチェによる称揚

ニーチェは、ある断章において次のようなエッカーマンに対する賛辞をささげている。

人はエッカーマンを読むがよい、そして自分自身に問うてみるのだ。かつてドイツにこのように高貴な姿で、かくも偉大なことを成し遂げた人がいたかどうかということ¹。

さらに『人間的な、あまりにも人間的なもの²』のなかで、エッカーマンの『晩年の日々におけるゲーテとの対話³』を絶賛している。しかもその程度は尋常ではない。ドイツ語の散文のうちで最も価値あるものとして、これを挙げているのだ。たとえばこうである。

仮にゲーテの著作、とりわけドイツ語で書かれたものの中で最高のものであるエッカーマンとの対話を除いてしまったら、幾度も繰り返し読むに値するドイツ語の散文から一体何が本当に残ることだろうか⁴。

このあとニーチェがやはり後世に残る作品として挙げている作品は、リヒテンベルクの箴言集、ユンゲーシュティリングの伝記の第一巻、シュティフターの『晩夏』それにケラーの『セルトヴィラの人々』であり、これでもうおしまいだというのである。ここに表わされているニーチェの好みに少々驚かされるのは当方だけではあるまい。なぜなら、かれの選択眼に適っ

¹ Friedrich Nietzsche: Nachgelassene Fragmente Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke in 15 Bänden 1980 München Band 7 S.686

² Friedrich Nietzsche: Menschliches Allzumenschliches II Ein Buch für freie Geister, Friedrich Nietzsche Sämtliche Werke Kritische Werke in 15 Bänden Band 2 1980 München

³ Johann Peter Eckermann: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens 1976 München 以下本論では『ゲーテとの対話』と記す。

⁴ Friedrich Nietzsche: Menschliches Allzumenschliches II Band 2 S.599

たものは、アフォリズムの先駆者としてニーチェが範とするリヒテンベルクは別として、かれ自身の精神と表現のほとんど対極にあるものといわざるを得ないからだ。たとえばシュティフターの『晩夏』は、教養小説風のおもむきを持っているが、その展開はかなり慎ましいものだ。しかしながら全体として人間世界の宇宙的な広がりを表しているともいえるほど息が長い。時代と自分自身に対する仮借なき批判者としては、彼が称揚する対象には総じて古風なあるいは古典的な感が否めないのだ。しかし、かれが最高のものというエッカーマンの『ゲーテとの対話』は、さらにそれらの上をいく悠揚迫らぬ古典といっても過言ではあるまい。

エッカーマンが1823年6月10日にヴァイマルの地にゲーテを訪ねて以来、1832年3月26日のゲーテの死に至るまでその言行を最も忠実に、そしてこまめに書き留めた『ゲーテとの対話』は、もちろんゲーテの著作ではない。ニーチェもかれの著作とは呼んでおらず、歓談にあたる Unterhaltungen という語を用いているが、それを少なくとも著作と同等かそれ以上の扱いをしていることは明らかである⁵。しかも、その際ゲーテの著作の中において「とりわけ」と強調してこの作品を際立たせていることは、いかにその偏愛が強いかをよく物語っていると言えよう。この点について少し考えを掘り下げ、展開してみたいと思う。

2. エッカーマンによるゲーテの受容

この『ゲーテとの対話』は、エッカーマンがゲーテの同意を得て、その死後編集し、出版したものである。それぞれ第一巻、第二巻（ともに1835年刊）、第三巻（1847年刊）というふうに分かれて出されている。大方は、編者自身が述べているように、エッカーマンの手になるものだが、特に第三巻に関しては、ヴァイマル宮廷に公子の教育係として勤務しゲーテとも深い親交のあったフランス人ソレの記録をも取り入れた体裁となってい

⁵ Ebenda また、歓談という意味合いもこの対話にははっきりと残っていて、本という形をとった著作よりも、語り合いによって、かえって生き生きとゲーテの世界が紡ぎ出されるような感がある。ここでその語を用いたニーチェの感覚にはまことに感心せざるを得ない。

る。しかしいずれにしても、エッカーマンの編集によるゲーテの言行録ということである。これが、エッカーマンの功績であることは言うまでもないが、そこにはこの著作の極めて特異な面が隠されているように思われる。

それは、エッカーマンが何よりも聴き手であり、編集者であるということにかかっている。かれは、文学と芸術の愛好家であったことはもちろんであり、それなくしてゲーテとの奇跡的な出会いはなかったであろう。しかし、物書きになるという希望も抱いたこともあったし、ゲーテに褒められたこともあったのだが、自己の世界の本格的な表現者になる道を歩むことはなかったのである。このことが、逆にかれの才能を開花させることとなったのだ。もともとそれほど豊かな内的モチーフを持っていなかったといえ、それまでかもしれないが、自己の才能のありようを確と見極めたということでもあろう。ゲーテのように世界の主人公然とした存在ではなくとも、それとは別の働きがありうるという好個の例であると思われる。それに、そのゲーテにしても自己表出は言うまでもなく盛んな詩人ではあるが、実はそれを補っても余りある受動の天才であったのだ。外界および内界の認識は、世界の受容によって支えられ、それは諸現象に身を委ねることに始まるというのがかれの世界認識の方法である。かれのよく知られた概念、デモーニッシュなものも人が表出するものというよりは、人はそれに襲われるといった方が実情に合っている。論理的に見ても、かような世界を受け止めるエッカーマンは受容する人でなければならなかった。かれはゲーテを賛仰するあまり、自らの存在を完璧な受容体と成し、人々にゲーテの姿を如実に伝えたのである。1823年6月10日にヴァイマルのゲーテの家の門をたたいたエッカーマンはもちろん通常の意味でも受け身の人であったろう。ことによったら、かれがゲーテに対して受け身の才能を見せるどころか、面会の機会に恵まれるということもなかったかもしれない。しかし、ゲーテのほうもその世界に対する開かれたありようは法外なものなので、二人の受容する天才はお互いの存在を受け容れることとなった。ここに、まったく相異なる個性どうしの友情という稀有な人間関

係がシラーとゲーテの間に生まれたのとは全く違った、これまた稀有な受容の関係がゲーテとエッカーマンの間に生まれたのだ。

あまた残されているゲーテについての記録は、膨大なものがあり、それ自体でゲーテ研究の基礎をなす独自の、文学とは言わないまでも文献学を形成している。そのなかでも、ゲーテ70歳代から80歳代にかけての晩年期という限定はあるが、エッカーマンの著作はひとときわ精彩を放っている。それは、やはりかれができる限りゲーテに忠実にその宇宙の受容体としての自己を見定め、その課題を実践的に着実に果たしたからであろう。これは、記録ではあっても、生きた記録であり、文学なのである。

3. 世界の受容と受容の世界

ここでエッカーマンの対象との関係性を見極めておかなければならないと思われる。というのも、これが、ゲーテの宇宙の実相を照射するかけがえのない装置あるいは土台となっているからである。すでに、両者における受容の相については触れたが、エッカーマンの対象に身を添わせる姿勢には、スケールにおいてゲーテには及びもつかないかもしれないが、構造的には同心円的に深くゲーテの宇宙を受容する姿勢と通じるものがあったといえるであろう。それは、原理的に言えば自己の存在を極小化することによって、かえって大世界を自己のうちに反映させてしまうという生き方である。このような凹面鏡のごとき存在のありようこそエッカーマンが体現したものに他ならない。この場合、中心点は小さければ小さいほど広い世界を映し出すのである。もちろんエッカーマンも人の子であるからこの原理を破ろうとすることもある。それは例えばある大学から英文学の教職を提供されたときである。この場合でもかれはゲーテにお伺いを立てている。そのときのゲーテの反応は、はっきりと否定的であって、取りつく島がないほどであり、さすがにエッカーマンは落胆したようである。この件を読むと思わずエッカーマンに同情の念を抱いてしまうくらいだ。ゲーテは自分の身近にエッカーマンをおいて手放そうとしない。おそらくゲーテ

の考えでは、エッカーマンが自分のもとから離れ、世間的な立身出世を図るより、かれにゲーテ自身を受容することを求めたのである。実際この判断は実に的確かつ有益なものであった。それは他ならぬこの営々と続けられる対話の記録が証明している。

また、エッカーマンが作家として自立するための試みをしていたころ、ゲーテに自作の批評を乞うている。この場合は、かれは肯定的あるいは積極的な反応を得ている。しかし、ゲーテは意外と他者、それも特に若い人に対してはおおむね寛大で褒めることが多く、ゲーテに褒められるのはごく普通のことであり、ある意味でその評価は月並みの才能ということにもなりかねないという評判さえ立ったという。そこまでのことではないかもしれないが、エッカーマンがゲーテに励まされたからといってその道で成功したわけではない。おそらくゲーテは、特に若い人の美点を引き出すことに熱心であったということなのだろう。これはその人が成功するかどうかということとはまた別の問題である。エッカーマンは、いずれにしても自力での創作の世界を断念している。エッカーマンの才能がいかにほどのものであったのかということは、吟味しても詮方のないことであろう。しかし、かれは自分の才能のありようを自覚したことだろう。それは、おのれの課題として、より広い、より大きな世界を確実に受容することである。これがゲーテとの対話ということに結実することとなった。

ただし、エッカーマンその人がありきたりの凡庸な受動的人間であったとは思われないということも事実である。この対話篇においても、もちろんこれもかれの手にかかるものではあるが、かれの言動がひとときわ輝く瞬間もなくはない。それも他者の借り物でもなく、ゲーテからの放射でもなく、場合によっては逆にゲーテへの放射であって、ゲーテの関心を深く喚起するものとなることがままある。それは、かれ自身が心底親しんだ弓についての話であったり、鳥の生態についての蘊蓄であったりする。これは、ほとんどかれの独壇場である。ゲーテはこのような場合、ひたすら聞き手に徹している。世界の受け手なのである。このような場合のエッカーマン

とゲーテのやりとりには実に澁刺とした生気があふれている。これはこの対話篇の魅力であろう。

それに加えて、ゲーテを中心にした文学や綺羅星のように登場する人物についてのエッカーマンの評言も決して月並みなものではない。ほとんど、ゲーテのいわんとすることの先取りと思われる発言が随所にみられる。このような場面では、エッカーマンはゲーテと一体化していると見た方がよいだろうと思われる。もちろんこの対話篇は、エッカーマンが編集したものであるため、そこにはかれなりの「詩と真実⁶」があると見るべきであろう。しかし、対話の相手にやはりそれなりの実質的な感覚と思考が備わっていなければ、実りのある対話など望むべくもない。その意味でエッカーマンはかなり高い定見を持っていたのだと思われる。

とはいえ、やはりかれの資質が最もその精彩を發揮するのは、聞き手という受容体としてのありように戻るときである。そのときにかれはなまじ積極的な表現者であるより、かえって途方もなく偉大なものを反映してしまうのである。かれが自力で創作物を作ることよりもはるかに豊かな実りをもたらしたといえるだろう。人は創造世界の能動的主人公である必要はなく、創造世界に対して受動的であっても、あるいはささやかではあってもかかわることによってその世界をより豊かにすることは不可能ではないのだ。むしろこのような生き方こそが人の辿るべき道行なのかもしれない。ゲーテは、その名も『人間の限界⁷』という詩において、人間の現世における営みを鎖の輪に譬え、それを一個の人間が着実に形成することによって次から次へと繋ぎ受け継ぐことを求めている。そこでは、人間の行為ではあっても神的なものに達するという可能性さえも示している。

⁶ 『詩と真実』(Dichtung und Wahrheit) はいうまでもなく、ゲーテの自伝であるが、この場合、詩と訳したところはDichtungである。ここには、単に文芸上の詩というよりも、フィクションあるいは小説といった意味合いがあるのだと思われる。その意味で、このタイトルは、真実を核とした文学作品といってもよいのである。エッカーマンに対してもゲーテの自伝のタイトルを献上したいと思う。

⁷ Goethe: Grenzen der Menschheit Werke Kommentare und Register Hamburgerausgabe in 14 Bänden Band 1 1974 S. 146-147

ゲーテは自分の詩作上の方法論について次のように語っている。

大体において、詩人としてある抽象的な理念を具体化していくというのは、自分のやり方ではなかった。私が心掛けたのは、心のうちに去来するいろいろな印象を受け止めることだった。その印象は、澁刺としていて、創造力が喚起した感覚的で、実に生氣あふれる、好ましくも多彩かつ多様なものだった。そのような印象や直観を心のうちに芸術として仕上げ、形成したのだ⁸。(1827年5月4日)

4. 自然世界との親しみと自然研究

さらに、ここで見過ごすことができないのは、先にも触れたこのゲーテとエッカーマンという両者に同心円的に共通する精神性である。それが相向かう対象は、ゲーテの場合はまさに現象世界そのものとそれを包摂する宇宙であり、エッカーマンにとっては、外界もさることながらそれよりも何とんでも生けるゲーテその人であるが、いずれの場合にもそれらに対する基本的な姿勢は、何はさておき、やはり受容である。しかも、全面的かつ全体的な受容である。仮にこの精神の同質性が存在していなかったとすれば、その出会いも実りもなかったことであろう。

この点でゲーテがあたかもかれの手になるファウストのように非常に広範な分野に関心を寄せ、それぞれにかれなりの独特なやり方で観察や研究を行っていたことは、意義深いことだ。ルネサンスの巨人レオナルド・ダ・ヴィンチはそれぞれの分野でとびぬけた専門家であったが、ゲーテにもそのような面が見られる。しかし同時にその違いも歴然としている。近代の人ゲーテは、時代がしからしめるところでもあろうが、レオナルドのようにその後の近代科学の基礎を用意するような万能の天才ではなかったのだ。ゲーテの方法論は、感覚と直感によるところ大であり、近代的な意味

⁸ Eckermann: Gespräche mit Goethe 4. Mai 1827

での厳密さには欠けるところがあったことは否定できない。このことに関しては、かれのニュートン力学に対する反発の強さを考えあわせるべきだろう。特に数量的、計算的な世界の把握には強い反感を持っていた。かれが晩年その『色彩論』が専門家を含めて世の評価するところとならなかったことを返す返すも残念に思っていたこともそうしたことの表れであろう。

これに反して、動物や植物の生物界におけるゲーテの業績には名高いものがある。おそらく生物の世界はまさに生きた把握が求められるのであろう。そして、それは同時に環境をも含めた全体的把握でなければならなかったのだ。生物界という領域の特性がゲーテには幸いしたものと思われる。ゲーテの世界探求の方法が一番顕著に表れてくるのは、自然を前にしたときである。そこでは、対象を観察することが研究の出発点であり、そのプロセスを通じて絶えずそこに回帰していることを考えれば、その基盤であるといってよい。かれの自然研究は、物理、化学、地学、気象、動物、植物など多岐にわたり、それらに関する観察記録や論文にも、量的、質的にも膨大なものが残されている。この対話篇においても自然現象に関する話題は、非常に豊富であり、それらはその中でもひとときわ生氣をはらんだ部分となっている。ゲーテもエッカーマンもここではほとんど無条件に自然と戯れ、その驚異に打たれているかのようである。さらにこの二人の間には、自然を虚心に観察するという点で、大いなる親和性が生まれている。実に優雅な共鳴である。かれらが共有するもの、それは何よりかれらの自然観察の仕方に見て取れる。自分をつつましい被造物としてとらえ、自然に対して最大限に自分の感覚を開くことで、自然を詳細に見ることはもちろんだが、それを総体としてとらえようともしている。だからといって自然界の法則性や体系性がすぐに見えてくるものでもない。かれらにとって自然とは、複雑系の現象にほかならないからだ。人はこれに対して、感覚と思考の開放性をもって接し、立ち向かう以外にはないであろう。この世界のありようを総体として見極めるためには、安易に自然のうちに理路を

求めるのではなく、事実を積み重ね、それを粘り強く一つの世界としてとらえることが必要なのだ。

5. ゲーテにおける神あるいは神的なもの

ことの性質からして、自然世界は単一的な論理で包摂されるものではない。複雑系の事象の総体を背後で支えるもの、これはゲーテの言葉では究極的には神ということになる。その際、ゲーテが神というのは、必ずしも宗教的な意味ではなく、我々がその中に住まう自然や宇宙の驚異や神秘的な事象、つまり現在のところ人知では及ばない領域をみそなわすもののことをいうのだ。これはちょうどドイツ語でGott weiß,あるいは英語でGod knowsというのが、人は分からないということに通じていることに見合うものである。これを文字どおりに受け止めれば、ゲーテの世界に通じることであろう。

ゲーテの宗教観については、実に様々な議論がある。そのなかには、ゲーテのキリスト教信仰の希薄さ、あるいはさらに異教的な傾向を指摘する向きもある⁹ (1830年3月5日)。たとえば、『ファウスト』第一部のグレートヘンとの教会堂での出会いの場面があるが、これが単に書割に過ぎないという批判である。また、この劇作品にはワルプルギスの夜の場面などを筆頭として悪魔的なものが充溢しすぎており、敬神的な面があまりにも弱いということも指摘することはできる。この対話篇においても、その話題がたびたび取り上げられている。しかし、そもそも神的なものあるいは大宇宙を志向するこの詩人を、狭義の意味でのキリスト者に位置付けることは乱暴な議論でしかない。ゲーテは神への信仰を問われれば明確に肯定的な自分の立場を明らかにしている。

最高度に混じりけのない自然と理性とに調和しつつ、今日においても

⁹ Eckermann: Gespräche mit Goethe 5. März 1830

我々の最も高い発展に寄与している完璧に優れたものを描いて、ほかに真実なものがあるだろうか。… (中略) … もし私が自分の本性にキリストへの畏敬の気持ちをささげる用意があるかと問われるなら、然りと答えよう。なぜとって、同様に太陽も最高なものの啓示なのだから。私は、太陽のなかにある神の光と生産の力を賛美する。我々は、あらゆる動物や植物、生きとし生けるものとともに、ただただそれによってのみ生き、動き、存在するのだから¹⁰。(1832年3月11日)

ここで注目に値するのは、ゲーテがキリスト教の核心に最高のもの、至高のものを見ていることは言うまでもないが、それと並列するように太陽を置いていることである。太陽はゲーテにおいて象徴的、精神的な意味を持つというよりも、むしろ有機的自然、そして生命の源と考えるべきであると思われる。かれのキリストに対する賛美はまぎれもないが、同時に汎神論的な自然賛美をも確かにとらえておくべきだと思われる。これに関しては、かれの純粋な宗教心を疑問に付す見方もあるのだが、これについては例えば、Stanford Encyclopedia of Philosophy¹¹ (7.7.2016) の汎神論 (pantheism) の項目にあるように、スピノザの神の概念からの影響を考慮すべきであろう。少なくともゲーテにとっては、神の概念は自然の諸現象と切っても切り離せぬ繋がりを持ってたということは確かなことであり、スピノザの無限の知性という神のとらえ方を踏まえていたものと思われる。実際かれは、ヴァイマル時代にスピノザの『エチカ』を熱心に読み込んでおり、ヘルダーやシュタイン夫人と議論を重ねている。次に掲げるエッカーマンのゲーテにとっての神の概念に関する要約的理解は、かれ自身の世界観を反映していることは確かだが、これもゲーテに触発されたもので、ゲーテの思考と考えても構わないであろう。

¹⁰ Eckermann: Gespräche mit Goethe 11. März 1832

¹¹ 2016年7月7日の版による。Stanford 2016

我々が今日神と呼んでいる大いなる存在は、ただ人間のなかに現れるだけでなく、豊饒で力強い自然、そしてまた大きな世界史的事件にも現れるもので、人間の本性に合わせて作られた概念では当然のことながら間に合わないのである。注意深い人に限って、小人物の場合、不完全さと矛盾に突き当たってしまうものであり、そうするとその場しのぎのごまかしか、自己欺瞞に陥るか、はたまたより高い見識に立つほどの大人物でなければ、懷疑あるいは自暴自棄になるのが関の山である。

ゲーテは高い見地をスピノザに見ていた。…（中略）…彼はそこに自分自身を見出し、スピノザのおかげですばらしい自己確立を果たしたのである。

さて、このゲーテの考えは主観的なものではなく、この地上における神の営みに基づいていたので、後年になってかれが自分の世界と自然の世界の研究を深化させていったときでも、用済みのものとして投げ捨てるようなことにはならなかった。…（中略）…

ゲーテに反対する者たちは、かれが無神論者だといって非難したが、実は、それはかれがそのような人たちのような信仰を持たなかったということに過ぎない。というのも、そのような信仰は彼にとって卑小に過ぎたからである。仮にゲーテが公然とその信仰を表明したとするならば、みんなは驚愕したことに違いない。だが、それはかれらがゲーテを理解する能力を欠いていたというだけのことである¹²。（1831年2月28日）

神という存在を実体として措定するのではなくて、我々をとりまく自然や環境や宇宙を観察したり、我々自身の個人としての、また集合体としてのありようには、いかに不可知なものがあまたあるのかということに思いをいたすときに、さらにそれらの存在同士の連関を考えると、浮上する概念が神であるというのがゲーテの神についての思想である。その際、諸

¹² Eckermann: Gespräche mit Goethe 28. Februar 1831

現象を抽象したり、理念にまとめ上げたり、簡便な論理で裁断することをかれは厳に戒めている。例えばあるとき自作『タッソー』の理念とは何かと聞かれて、彼はその問いそのものに反発しながら、次のように答えている。

理念だって？ そんなものこちらの知ったことではないよ。私にはタッソーの生活があったし、私自身の生活もあった。それぞれに個性を備えた二人の人物を混ぜ合わせて私のタッソーと相成った。…（中略）…ドイツ人とはじつに変な人たちだ。どんなものでもそこに深い理念や思想を探し出そうとし、それをまたいろんなところに持ち出し、そのせいで生活を不当なまでに重苦しいものになっている。まあ、もうここでそういうことはやめて、思い切り、多様な印象に身をさらしてみたらどうなんだ。心ゆくまで楽しんだり、感動したり、大いに奮起したり、人のいうことを聴いたり、偉大なものにあこがれて情熱を燃やしたりして、元気にやったらどうだろうか。抽象的な考えや理念でないと何もかもが空虚だなどと思っではいけないのだよ¹³。（1827年5月6日）

6. 抽象論と近代科学に対する反発

ゲーテの理念や観念に対するほとんどアレルギーともいうべき防御的反応は、様々な場面で観察できる。その一例としては、先に触れたニュートン力学に対する反発もそうであろう。多分これに対するかれの反措定は『色彩論』である。ゲーテにとっては自信作であるこの著作に対する評価は今日なお、高いものがあるとは言えないが、その独自性の一つに色を単なる物理的なもの、客観的なものととらえるのではなく、その受け手の側すなわち人の感覚の問題が提起されていることに注意しておきたいと思う。これは色彩の物理的解明というよりも一種の有機的科学なのだ。これは、明

¹³ Eckermann: Gespräche mit Goethe 6. Mai 1827

らかに計量的志向性を持つ19世紀からの近代科学の路線とは異なる独自の捉え方だ。そして、ゲーテは植物についての自らの著作『植物の変態』に関して、それが直観演繹の方法に基づいていると認めているが¹⁴（1827年2月1日）、そもそも自分の自然科学研究全般にわたって次のようなことを述べているのである。

私は、自然研究をかなり多分野にわたって進めてきた。だが、その研究の方向は、絶えずこの地上でごく身近にあって、私の感覚で直接とらえられるような対象に向かっていた¹⁵。（1827年2月1日）

また、天文学に関しても、例えば星座に関して、彼は単なる物理的關係性を問題にするよりも、古代ギリシャの神話や動物などの登場する物語的な図像世界のほうが豊かだと言ってはばからない。また、歴史学についても19世紀には資料や記録中心の近代的な歴史批判といわれる新しい分野が開かれていくが、これに対してもゲーテはかなり批判的であり、それよりもあえていえば文学にかなり近接する物語的な歴史学を好むのである。それはたぶんかれが生きた人の姿を捨象するわけにはいかなかったからであろう。いずれにしてもゲーテの世界には感覚の要素が不可欠というほど大きな役割を果たしている。

このようなゲーテの仕事の特性は、エッカーマンもその点について若干の危惧を禁じ得ないが、近代的な意味での専門家のものではなく、素人らしさを持ったものである。その仕事が特に自然科学の分野では19世紀近代の主流にならなかったのも故なしとはしない。この点でゲーテはあえて反時代的な姿勢を見せていたと言ってもよいだろう。しかし、それは別の面での展開を見せており、後の時代のデイルタイ、ニーチェ、シュタイナーなど有機的な生の哲学へと道を切り開くものでもあった。

¹⁴ Eckermann: Gespräche mit Goethe I. Februar 1827

¹⁵ ebenda

7. 近代における反時代性

さらに際立つ反時代的姿勢としては、哲学に対する懐疑的な見方が挙げられるだろう。ゲーテは哲学に対して拒絶するということではないが、はっきりと距離を置いている。

私はいつもそれ (=哲学) から自分自身の身を引き離して自由に保ってきた。健康な人間理解というのが私の立場だった¹⁶。(1829年2月4日)

このゲーテの立場が注目に値するのは、カントからヘーゲルへと連なるドイツ観念論の上昇気流のうちにあって、さらにはフランス革命を同時代人として仄聞したドイツ啓蒙思想の代表格とみなされたゲーテの時代の動きに対する極めて慎重どころか懐疑的態度が明らかであるからである。ときの若い世代から保守どころか反動的とみなされたのも不思議なことではない。エッカーマンとゲーテの間でこの主題に関して次のようなやり取りが残されている。

私は思わず口を滑らせてしまった。「あなた (=ゲーテ) は悪く言われましたね。あの危機の時 (=対ナポレオン解放戦争) に、武器もとることもしないで、またせめて詩人として寄与するということもなかったというように。」ゲーテは答えて言った。「その話はやめよう。愚かしい世間のいうことだから。自分の求めるところがなにかもわかっていないやつらには勝手に言わせておけばいいのだ。憎しみを覚えないのにどうして武器がとれるだろうか。またいい年をして。… (中略) …誰もかれもが一様に祖国に奉仕するわけにはいかないよ。神の与え給うたものに従い、各人がその最善を尽くすことで十分なのだ。私といえば、当時50年間も労を惜しむことなく努力してきた。自然が日々の定めとして課した

¹⁶ Eckermann: Gespräche mit Goethe 4. Februar 1829

仕事に昼夜を分かたず挺身し、たえず努力し研究し続けてきた。最善を尽くしたといってもよい。各個人がこのように自分に関して言うことができたなら、何もかもうまくいくのだらうけれど¹⁷。(1830年3月6日)

たとえば、ゲーテの『マイスター』を革命の時代の表徴の一つとして掲げた急進的思想家フリードリッヒ・シュレーゲルが、急展開して反動の権化ともいうべきメッテルニヒの片腕となった成り行きを考えてみれば、何とも皮肉な感慨を禁じ得ない。このフリードリッヒ・シュレーゲルは、ゲーテからその博識や才気は認められてはいるが、小賢しい小才としての批判の対象とされている。

また、ヘーゲルは、ゲーテからその人柄にたいしては好意をもたれているし、何よりもかれが不遇をかこっていたゲーテの『色彩論』を支持し、ニュートン力学に反対の立場をとったことで二人は友好的な関係にあったが、その思想に対しては、ゲーテはかなり辛辣な批判を浴びせている。ヘーゲルがゲーテ宅に招かれて歓談した折、自説の弁証法についての話を展開するということがあった。ヘーゲルはゲーテに劣らずここではなかなかの社交家である。そのときの情景が彷彿とするようだ。

話の主題は、弁証法の本質ということになった。ヘーゲルは語った。「これは、だれの精神にも宿る矛盾を法則化して、方法論として形成したものにほかなりません。このような力は、真なるものと偽なるものを峻別する際にその大いなる効能を発揮します。」これに対してゲーテが口をはさんだ。「ただし、そのような精神の技術や能力が濫用されて、往々にして偽なるものを真としたり、真なるものを偽としたりすることがないようにしなければいいのだが。」ヘーゲルはそれに対して、「まあ、そのようなことはよくあることです。しかしそういうことが起こるのは精

¹⁷ Eckermann: Gespräche mit Goethe 6. März 1830

神を病んだ者においてだけです。」ゲーテはさらに言い返す。「それならば、自然研究のほうがずっといいな。なぜなら、そこでは普遍的真理こそ目標であって、対象を観察したり、取り扱ったりする場合、その当人が一貫して純粹かつ誠実に行わなければ、即座に失格ということになり、否認されるだろうから。たくさんいる弁証法患者は、自然研究によってその病をうまく治すことができると確信しているよ¹⁸。(1827年10月18日)

この件などまるで、人間を知り尽くしたメフィストフェレスが、一本気のファウストを手玉にとっているかのような諧謔に満ちた、しかし真実のこもった対応である。このゲーテの最後の発言が終わると、ここに招かれていたツェルターなど雰囲気の変化に驚いたのか、気まずい思いのうちにそそくさと辞去している。ゲーテは決してヘーゲルを頭から否定しようとはしていない。ただその思考の行き過ぎをやんわりと、しかし明確に指摘しているだけなのである。それにしてもゲーテの射程は長いといわざるを得ない。なぜなら、ヘーゲルが問題にしている領域は、あくまでも思考の内部における精神の対立とその矛盾の解消であるが、ゲーテは、ヘーゲルのその危うい方法論に対して精神と思考の外部にある自然の領域を対立させているのだから。ゲーテからすれば、ヘーゲルの弁証法的対立が新たな真の総合的次元を生み出すという保証はどこにもないのだ。それはあつたとしても力業か、虚偽にすぎないものだろう。ゲーテの指摘するところは、ヘーゲルの方法論の核心であり、また最大の陥穽である。そこには、自然の要素が欠落している。しかし、近代の歩みはゲーテの考える道をたどることはなかった。

ヘーゲル哲学の影響は、ゲーテ存命当時でも相当広範囲に及んでいたものとみられる。たとえば、哲学者ヒンリクスが表した古代ギリシャ悲劇論

¹⁸ Eckermann: Gespräche mit Goethe 18. Oktober 1827

をめぐっての議論のなかで、やはりヘーゲルの名がかなり否定的色合いをもって引き合いに出されるのである。ゲーテはこの著作の問題提起についての美点を認めつつも、読みにくさ、論の運びのぎこちなさを指摘し、その原因をヘーゲルからの影響に求めている。ゲーテの言うところはこうである。

かれは、北ドイツの海辺の人らしい質実剛健な資質を備えているにもかかわらず、なまじヘーゲル哲学に調教されたために、自然のありのままにものを見たり考えたりすることが難しくなり、次第に考えと言い回しがぎこちなくなり、もったいぶったという感じになったのは残念なことだ¹⁹。(1827年3月28日)

8. 自然研究礼賛と近代精神への危惧

ヘーゲルに対しては散々なあしらいをしたゲーテだが、それと対照的な純粋に心からの敬意をささげている相手に博物学者のアレクサンダー・フンボルトがいる。かれは、自然科学者という名前がしっくりこないほどスケールの大きな自然の探求者であり、南米やシベリアを含む地球規模の探検家であり、地理学者であり、植物の生態を中心とする博物学者でもあり、今日いうところの文化人類学者でもあった。ゲーテは1797年よりかれと親交を結び、広範な知識を授けられており、かれに最大級の賛辞をささげている。

何とすごい男だろう。久しくかれを知っているにもかかわらず、あらためてかれには驚嘆を禁じ得なかった。かれには知識と生きた知という点で並ぶ者がいないということは断言できる。同じく私に対して示されたかれの多面性は、こんなものに今まで出会ったためしが無いほどだ。ど

¹⁹ Eckermann: Gespräche mit Goethe 28. März 1828

ちらの方面を向いても全て自家葉籠中の物というわけで、我々に精神的な宝物を惜しみなく与えてくれる。多くの管を備えた泉水のような存在で、どこにおいても器さえ用意すれば、清涼な水が汲めどもつきせず湧き出てくる。かれは何日か当地に滞在することになるだろうが、もう何年もかれと時を過ごしたかのような気がするだろうとすでに予感している²⁰。(1826年12月11日)

ゲーテは、アレクサンダーの兄である人文学者ヴィルヘルム・フンボルトとも親しい関係を持っていたが、アレクサンダーとの関係のほうがより内的に緊密なものであったようだ。それはおそらく、自然研究を介してのつながりの強さによるものであろう。ゲーテの自然研究への関心は、ほかの分野に比べても際立って強いと言ってもいいだろう。晩年のゲーテはその関心を次のように語っている。

自然研究が我々に与えてくれる喜びに勝るものはない。自然の神秘的なものは見究めがたいものだ。しかし、絶えず観察を広げることは、我々に許されたことであるばかりでなく、我々はそういう課題を負っているわけだ。それに、最終的には究明し難いままに残るとしても、まさにそのことが我々にとって、繰り返しそれに迫り、繰り返し新しい洞察を得るべく新しい発見を試みる永遠の刺激となるのだ²¹。(1831年7月15日)

ここで指摘しておきたいことは、そのようなゲーテの自然研究への関心のありようが、その分野に留まるのではなく、ほとんどかれの関心の対象になるあらゆるものを見る見方をも基本的に支えているということだ。このことは、文学についてもいえるだろう。文学は多様な人間現象を取り扱うが、ここでも分かることよりも分からぬものの領野ははるかに広いので

²⁰ Eckermann: Gespräche mit Goethe 11. Dezember 1826

²¹ Eckermann: Gespräche mit Goethe 15. Juli 1831

ある。わけ知り顔で一般論を展開するのではなく、人のありようを丹念に追求し、新たな発見をするというのが彼の方法であった。その基本的な姿勢は、自然を相手にするのと同じように、人間的事象を限りない受動的態度で受容し、認識を深め、その成果を造形することであった。

このような法外に開けた世界は、果たして近代人のものだったと言えるであろうか。ゲーテは、人間存在の賛歌を謳いあげるヨーロッパ近代を代表するような人物であったことは確かだ。しかし、台頭するロマン主義がその最先端だったとするならば、かれは時代遅れと言われかねないほど反時代的でもあったのだ。またその作品は意外と世間からは不評でもあった。この点で、かれは畏友シラーを羨んでさえいる。実際時代の思潮的な主流はシラーから初期ロマン派へと流れていくのだ。そして、ゲーテは、シラーのことを危惧しながら、次のような感想を漏らしている。

かれ（シラー）を苦しめるようにその詩作に影響を与えたのは、青年期には自然的な自由であり、長じては精神の自由であった。自由というものは不可思議なものだ。自ら足ることを知り、自分のありように安んじることを心得ていれば、いかなる人でも容易に自分に足る十分な自由を享受できるのに²²。(1827年1月18日)

9. 結語

エッカーマンの『ゲーテとの対話』は、1823年6月10日から1832年3月11日までの期間、ゲーテの身近にいてその言動をつぶさに観察した記録をもとに編集されたものである。ということは、ゲーテの人生のうち晩年の10年近くの時間についての記述であって、厳密に期間でいえば、ゲーテの世界といっても、晩年期に限定されていることは明らかである。これをもって、ここに紹介されているゲーテの世界は、かれの晩年の境地を表すもの

²² Eckermann: Gespräche mit Goethe 18. Januar 1827

だといっても構わないが、ここに読み取れるゲーテの世界に対する法外な開放性、謙虚さ、あるいは敬虔さという特質が果たしてかれの精神の晩年様式というふうに解釈することができるだろうか。かれの若年の疾風怒濤時代や壮年期の古典期のことを考えてみると、むしろそのような特質はかれの生産的な生涯を貫くものではなかったかと思われる。この対話篇には晩年あるいは老年という要素が強くあったとしても、それはただ己の精神のありようの再確認ということではなかっただろうか。こうしてみると、ゲーテは輝かしい人間存在肯定の精神を見ても、ヨーロッパ近代という時代を先駆的に担ったことはいうまでもなく確かなことだが、かれを前近代(vormodern)あるいは近代の後(postmodern)の精神を体現していたというようにとらえた方が正確な認識と言えるのではないか、さらにかれの反近代的姿勢はこのようにとらえるとよりよく理解できるのではないかと思われる。そもそも、ゲーテの精神は、通常の意味での晩年様式という概念を無効にするほどの広大さを備えていたと言えるだろう。

このような詩人の特質を如実に知らせてくれる記録がおそらくはゲーテ作ではないもう一つの『詩と真実』として残されたというのも、ひるがえって見ればやはりエッカーマンという偉大な受容者がいたからこそである。ゲーテの対世界の受容と見合うように、ゲーテという偉大な受容の世界をエッカーマンは受容的に造形することに成功しているが、これが可能であったのも、この両者が偶然的そして自然的な世界に対して驚くほど広くその感覚と思考を開いていたからなのだと思う。それは自然と人為からなるこの世界に対する敬虔さの表れだと言うことができよう。エッカーマンの『ゲーテとの対話』は、そのような精神から生まれた世界受容の創造的生産性の成果であり、奇跡的な作品である。